



図 7

アセトンを用いた時には PEG の検量線から分子量の変化に対する溶媒の溶出量の差が小さいので分離して得る事は出来なかったが、分子量の分布曲線として得られ単独で用いた場合は検量線の位置と良く一致した。またメチルアルコールを用いた場合には、ナフタリン、アン

トラセンは完全な分離はできなかったが、ベンゼンは完全に前二者と分離して得られた。

したがってこのようにして得られたポラスポリマーは、クロマトの操作を阻害することなしに溶媒により孔径を変化させることができ、精密な孔径を有するものの組合せを変える事なしに広い分子量の分布に適應することができるものと思われる。すなわちこの実験では、アセトンでは分子量の分布の大きな場合に、またメチルアルコールは分子量の比較的近いものの分子量分布または分離に使用できる可能性が得られた。

このようにして、高分子多孔性物質をカラムの担体として用いて溶媒を変えて使用することにより溶液中での見かけの分子の広がりまたは分子量を推定できる可能性が得られた。

(1970年8月24日受理)



10 月号 正 誤 表

ページ	段	行	種 別	正	誤
23		6	ローマ字 ネーム	Takashi SHODA Shuzo MURAKAMI Ryohji SHOHOA	脱 落